

野党指導者としてのスタンリー・ボールドウィン(一)

——第一次労働党政権下のイギリス保守党——

梅 津 実

一 敗北

二 ボールドウィン下野

三 党再建への摸索(以上本号)

一 敗北

一九二三年の一二月、この月のはじめ、ときのイギリス首相スタンリー・ボールドウィン(Stanley Baldwin)はおそらくかれの人生でいまだかつて経験したこともないような深い失意のなかにあった。政治家としてはじめて首相の座を手中にし六ヶ月を経たいま、党内外の猛反対を押しきりあえて断行した総選挙にかれは完全に敗北したことが判明したからである。もともと、この一九二三年の総選挙はボールドウィンにとっては自己の政治的将来を約束する跳躍台となるはずであった。けれども、その決定的瞬間にかれはみごとに蹉跌をきたしたのである。総選挙直後、党内の政治的ライバルたちがボールドウィンの首相としての適格性にただちに疑義を呈したように、⁽¹⁾かれの前途にはこれ

野党指導者としてのスタンリー・ボールドウィン(一)

同志社法学 三三卷四号

一 (五〇七)

を契機としてむしろ暗雲すらたれこめはじめた。ボールドウィンもみずから自嘲の言葉を口にして、「なるほど自分がただ正直に信じていることを政治の世界において実行しようとすることになる」と、誰しも必ず挫折を強いられるものだ⁽²⁾、と嘆息せざるをえなかったのである。

たしかに、考えてみると一九二三年一二月の総選挙はやはりいささか強引にすぎる選挙であったかも知れない。これより一ヶ月前の二三年一月はじめ、首相が「保護貿易政策」を掲げて総選挙に突入するのではないかと言う噂が政界に流れるや、閣僚のほとんどは、これに対して懐疑的な姿勢を示すかも知しくは総選挙そのものに反対する態度を露骨に示した⁽³⁾。それに思い起してみると、総選挙に反発する動きは決して閣僚レベルにとどまらなかった。指導的な立場にある党官僚たちも同様の態度をとったし⁽⁴⁾、また保守党系の各新聞ですら一様に首相の考えに批判的であったのである⁽⁵⁾。政敵たるビーヴァーブルック (Lord Beaverbrook) やロザミア (Lord Rothermere) たちの新聞がこの動きを意識的におおりに、ボールドウィンの意図をくじこうとしたことは言うまでもなかった⁽⁶⁾。ボールドウィンは、これら閣僚、党官僚、新聞に、さらに財界をも加えた各界すべての意向にさからいいわば四面楚歌のなかで、あえて孤独の決断をしたのである。敗北は当然の結末である、と言われても弁解の余地はなかったのかも知れない。

しかしボールドウィンにしてみれば、この総選挙はやはりどうしても一度自力でやりとげなければならぬ重要な関門であったのである。それはそうであろう。前年一九二二年一〇月「カールトン・クラブ集会」で保守党を連立内閣から離脱させるのに奮迅し、ついで成立した同年一〇月のボナ・ロー (Bonar Law) 内閣においていちやく蔵相に抜擢され、さらに喉頭癌でたおれたボナ・ローのあとを襲い二三年五月首相の印綬を帯びたとは言え、かれはまだ著しく知名度の低いしたがっていわば予期せられざる首相であったからである。だからボナ・ローのあとをうけて首相

職を大過なく無事これつとめあげることよりも、むしろ政治家として有権者の審判をあおぎ、ここで名実ともに首相の座を掌中のものにしようとしたとしても誰れもかれの権力衝動をせめることはできなかつたにちがいないのである。⁽⁷⁾ それにポールドウィンには、このとき積極的に「保護貿易政策」をうちだすべき必要性も、またいざとなれば総選挙を勝利にみちびく成算も充分にあった。前者に関しては、当時自由貿易主義者から保護貿易主義者に転向することにより保守党々員にも重大な影響をおよぼすのではないかと噂されていた連立主義者ロイド・ジョージ(Lloyd George)の機先を、これによってあらかじめ制することができはらずであつた。⁽⁸⁾「ポールドウィンはわたしにナイフを突きつけた。わたしもかれにナイフを突きつけなければ……」⁽⁹⁾とロイド・ジョージを呻めかせることができたのである。また後者に関しては——これは結果として誤つた情報であつただけでも——J・C・C・デイヴィットソン(J. C. Davidson)などポールドウィンの取り巻きの判断とそれに一部党官僚による立候補者数と当選者数に関する試算が、かれに選挙で勝てるという自信を与えていた。⁽¹⁰⁾ポールドウィンとしては、「保護貿易政策」のもとに総選挙を勝ち抜き、それを通して自己の権力を確固たるものにすると言ふ、ここ一番の賭にでてみる充分な理由をもつていたのである。

もとより、当時のポールドウィンが、およそ「決断」をうりものにする華やかな指導者などから遠くかけはなれた茫洋たる人物として人々に知られていたのは事実であつた。しばしば指摘されるように、当時も現在もほとんどの人がかれのイメージのなかに安物のパイプを燻らし、豚を飼うことに相好をくずす実直な田舎者の姿をみてとつて⁽¹¹⁾いるのも、まことにこの時代のポールドウィンのすべてを言い当てて妙である、と言えよう。かれが大体においてその通りの人物であつた点については疑う余地はないようである。しかし最近多くの歴史家たちや政治家たちまでが時折回

想しているように、ボールドウィンは他面においても感じやすいきわめて繊細な気質ももっており、意外なことにときに直情的な行動にはしることさえあったのである。⁽¹²⁾ みかけはつねに陽気であった。しかしその陽気さにはしばしばメラニコリックな心情が隠されていることもあり、⁽¹³⁾ 実際にかねは「単純な人間であることを装った複雑な性格を有する」⁽¹⁴⁾ 政治家である、とも言えたのである。世間は依然として、ボールドウィンを人の言いなりになりすぐに騙されてしまう御人好しとみなしていた。かれが総選挙に踏み切ったのも、おそらくは性急にことをはこぼうとする保守党官僚の突きあげを押えることができず、ただ操り人形のように動いただけであったからにちがいないと、人々は想像していた。⁽¹⁵⁾ だが、真相はまったく逆であったのである。ボールドウィンはみずからある種の感情にかられ、意図的に「総選挙」と言う断固たる行動をとり、そして一敗地にまみれたのであった。

ともあれ、保守党が今回えた議席数は全部で二五八にとどまった。この数字は前年度一九二二年総選挙時における同党の獲得議席数三四四から実に八六も減じた数であることに注目しなければならないであろう。しかも労働党の一九一議席と自由党の一五八議席の合計したものに、この数字ははるかにおよびない。⁽¹⁶⁾ だから、たとえ保守党が下院で相対的多数を占め依然として第一党であるとはいっても、院内における同党の敗北は誰れがみても歴然としていたのである。それに今回は、労働党も自由党もともに保守党の掲げた保護貿易政策に強く反発し、逆に自由貿易政策を掲げその大合唱によって躍進することができた。⁽¹⁷⁾ それゆえ選挙後の議会が、かりに「保護貿易」か「自由貿易」かとう言う争点のもとにあらそわれるようなことにもなるとすれば、保守党がなおこのまま単独で少数政権を維持してゆくことなどたちまち困難になることは、火をみるよりあきらかであったのである。一月六日の投票終了後、自分の選挙区ウォーシスターシャー (Worcestershire, Bewdley) からロンドンに帰ったボールドウィンは、選挙結果について

も右のような問題のゆくえについても何ら公的に示唆することなく、また一片の声明文も発することなくただ沈黙を守っていた。⁽¹⁸⁾しかし多くの新聞は右の事態からして、おそらくボールドウィンの保守党々首と首相職辞任は必至であろうと断定していた。⁽¹⁹⁾ボールドウィンは敗北の責任をどうとるのか。またもしかれの辞任が事実となるにしても保守党は誰れを代りの党首として戴き、どのような政権を構築するのか。保護貿易政策はどうなるのか。政局はにわかには緊迫の度をたかめてきたのである。

このとき、失意のボールドウィンは周知のように家庭内のプライベートなごたごたにもおおいに悩まされていた。戦時中西部戦線であらわれの身となり、カリエスをわずらって帰国したときにはすでに手のつけられない状態になっていて、家族の皆なに反抗的な態度をとっていた長男オリヴァー (Oliver Baldwin) の問題がその一つであった。オリヴァーはみずからマルクス主義者の群に身を投じ、一九二三年の総選挙中にもさかんに父首相の行動を揶揄し、マスコミによって恰好のスクランダラスな話題とされていたのである。⁽²⁰⁾ボールドウィンにとっては頭痛のたねであった。もう一つは、祖父の代から営々としてきづきあげてきたボールドウィン家の財産が、第一次大戦後急速に傾き、ボールドウィン自身の持ち株も激減し、このときかれが財政的に相当まいいっていたと言ったことであった。⁽²¹⁾ボールドウィンにとってはこれも初めての、しかも衝撃的な経験であった。政治的敗北とも重なりあってかれはいわば二重・三重の苦痛のなかにあったのである。しかしそれはともかくとして、ボールドウィンはいまなお保守党々首であり依然として「首相」であった。それに、かれは右に述べたような重大局面に直ちに対応してゆかなければならなかった。またその局面にふくまれる流動的要因と複雑な構造からして、かれが示すであろう問題の処理の仕方の一つ一つは、少なくとも戦後イギリス政治史に大きな転換を刻すことになるはずであった。人々はひそかにかれの一举一動に注目して

いたのである。だから、かれには敗北の感傷にひたり身近な問題に拘泥している余裕など実際なかった。なお政治家として孤独な決断を重ね、あくまでも責任ある行動をとらなければならない立場にあったのである。年があける一九二四年は、おそらくボールドウィンにとっては最も厳しい人生の試練の年となるのではないか。かれ自身はもとより、かれを知る者は誰れでもみなそう思っていたにちがいがなかったのである。

二 ボールドウィン下野

総選挙に敗れたのち、ボールドウィンのとらうとした行動はとりあえず辞表を提出することであった。失意のかれに付き添い、訪れる閣僚の一人とてないガラソとした首相官邸でボールドウィンをなぐさめつづけた内閣官房次官トーマス・ジョーンズ(Thomas Jones)は、投票日の翌一二月七日、悲嘆にくれるボールドウィンを見て首相は少なくとも辞意を固めている、と確信した。T・ジョーンズは、電話をとりあげJ・C・C・デイヴィットソンにこのことを話し、とにかく首相を慰留してくれるよう懇請したのである。⁽²²⁾ 事実ボールドウィンは、翌朝一二月八日国王秘書のスタンフォードハム(Lord Stamfordham)との会見のさいに自分の胸中を披瀝し、辞職を申し出る意向であることを明らかにした。ボールドウィンはその政治責任をあたかも辞職と言う形で結着づけようとしているかのようであった。⁽²³⁾

しかしスタンフォードハムに会った同じ日の午後、チェッカーズに籠ったボールドウィンはネヴィル・チェンバレンやJ・C・C・デイヴィットソンなど身近な同志たち数名を同公邸に招いてあらためて情勢を検討し直した。⁽²⁴⁾ 週末

のチェッカーズでかれらがどのような議論をかわし、どのように情勢の展開を読んだのか、その詳細についてはここでは知るよしもない。しかしそうしてえたかれらの結論はきわめて明快なものであった。すなわち現時点では首相の辞表提出をみあわせること、そしてポールドウィン内閣のもとで議会を召集し、議会で堂々と現行内閣を支持するか否かの信を問うこと、これであった。⁽²⁵⁾ポールドウィンは当初の決意を翻意しかろうじて辞表提出をとどまったのである。そしてこれはまた国王の意向にもそうものであった。⁽²⁶⁾いずれにせよ、一月一日の閣議は右の方針にもとづきつぎのような決定を下した。「憲法上の諸先例を慎重に検討し、かつ総選挙後派生した状況をこれに照しあわせてみた結果、内閣は今朝満場一致で意志統一し、内閣の憲法上の義務はできるだけ早急に議会を召集することにあると決定した。したがって議会は、すでになされた準備どおり、きたる一月八日に再開されるであろう」。⁽²⁷⁾総選挙終了後、こうしてすくなくとも事態收拾に関する一つの方針が提示されたのである。

しかしこの内閣決定は、よく考えてみるときわめて重大な問題をふくんでいた。と言うのも、もしこの決定通りにそのままゆけば、議会は再開と同時にいまや少数政権となった保守党内閣を不信任し、「憲政の常道」にしたがい、そのままゆけば、議会は再開と同時にいまや少数政権となった保守党内閣を不信任し、「憲政の常道」にしたがい、政権を下院第二党たる労働党に与えることもできるからである。換言すれば、ポールドウィンの下した「決定」はイギリスにおける社会主義政権誕生の可能性を暗黙の前提としてなりたっていたのである。『タイムズ』(The Times)などは、かつてグラッドストーンが行なった先例を引用しつつ、この一日の閣議決定を一応「賢明な決定」であったと評価した。⁽²⁸⁾しかしイギリスに初の社会主義政権を認めるかどうかと言うことになるのであれば、やはりことは必ずしもそれほど簡単ではなかった。⁽²⁹⁾総選挙の敗北が明らかになった一月七日より右の閣議決定をみた一月一日までの四日間に、保守党はその内部においてこれらの問題の処理と新しい政局の方向の決定をめくり、実際に左に

大揺れにゆれ動いていたのである。

このときの保守党内における最も重要な動きを一つ指摘するとすれば、それは政局の方向づけとの関連においてボールドウィン打倒の奔流が党内に激しく渦巻いていたと言うことであろう。しかもこの流れに棹さし、「首相」の辞任を積極的に画策した推進者は、一部の現職閣僚をふくむ党の長老グループ、すなわちオースチン・チェンバレン(Austen Chamberlain)、『バークンヘッド(Lord Birkenhead)』それにダービー(Lord Derby)などを加えた「右翼の中心的勢力」⁽³⁰⁾を代表する人々であった。かれらの周辺に群がる人々の多くは、前年二二年一〇月の「カールトン・クラブ集会」においてボールドウィンは自身の行動によって失脚させられた人々であり、したがってオースチン・チェンバレン派と概括されるこのような人々(ただしダービーは別格)にとって、二三年一二月の冒頭はまさしくその政治的失地を回復させ、ボールドウィンに一矢報いる絶好の機会であったにちがひなかったのである。オースチン・チェンバレンの弟(義弟)ではあるが、しかしボールドウィン派に属していたネヴィル・チェンバレンは、このときの情勢について述べて、まさしく党は「陰謀の巢」⁽³¹⁾と化していたと書き残している。しかし歴史家K・ミドルマス(K. Middlemas)とJ・バーネス(J. Barnes)たちに言わせれば、このN・チェンバレンの表現は「むしろあらゆる点からして軽るすぎる見方」⁽³²⁾でさえあった。言い換えると、一日の閣議決定にいたる数日間、ボールドウィンは、党長老グループの反乱と言うかれの政治的生涯に一度あるかないかのきわめて危機的な状況に直面して苦悶していたと言うことなのである。⁽³³⁾

ボールドウィン打倒を画策したオースチン・チェンバレン派の考えを、ごく単純に要約するとそれは次のようなものとして考えられよう。すなわちボールドウィンには総選挙敗北の責任をとらせ詰め腹を切らせる。そのうえで、社

会主義政権の登場を阻止しうる何らかの形の政権を樹立する。しかも下院において、保守党の議席数が野党各派の議席数の合計したものに及ばないと言う現実をふまえると、そうしてできるであろう「政権」は結局は保守党と自由党による連立政権以外に考えられない。したがって、——オースチン・チェンバレン派の領袖バークンヘッドの言うところによれば——首班指名にあたり、「国王はマクドナルド (Ramsay MacDonald) を締めだし自由党＝保守党連立内閣を作るため、バルフォア (Lord Balfour) か、ダービーか、オースチン・チェンバレンか、アスキス (H. H. Asquith) かグレイ (Lord Grey) か、あるいはバークンヘッド自身を召喚すべき」⁽³⁴⁾である。もとより、こう主張しながらも、バークンヘッドが後継首班の本命をオースチン・チェンバレンに擬していたことは言うまでもなかった⁽³⁵⁾。ともあれ、以上がかれらの考えの骨子なのである。そして、これは一九二二年一〇月以前の体制の、ただしロイド・ジョージをはずした体制の復権をはかるものにほかならなかった。社会主義への防波堤は政党政治の形によってではなく、あくまでも「連立内閣」によってしかえられないと、かれらは考えていたようである。⁽³⁶⁾

それゆえ、ここで注意しておかなければならない点は、右の「連立内閣」構想が政局の運用に関して自由党にも重要な役割を与えることを予想していたのだから、当然、ボールドウィン打倒の動きは保守党内に限定されず、このときさらに大きな波紋となって広がる可能性もあったと言うことである。すなわち、もし自由党がオースチン・チェンバレン派の動きに呼応し「連立内閣」樹立の工作を受け入れるようなことにもなれば、それはそれだけで直ちに問題の帰趨を決したにちがいがなかったのである。ただこのときの自由党は、全体として凋落の一途をたどっており、実際問題としては状況を有利に動かす問題意識にも力量にも欠けていた。たとえば、同党は労働党を政権につけるか否かで賛成派、反対派の二つに分裂し保守党以上に苦悩していた。⁽³⁷⁾ それに党首アスキス自身、のち一二月一八日に言明

して自由党は保守政権の延命に手をかざすと一応その旗幟を明らかにするけれども、⁽³⁸⁾しかし実際は、それ以前においても以後においてもこの複雑な政局にいかに対応するかに苦慮し、その「決断」におおいに躊躇し逡巡していたのである。⁽³⁹⁾しかしそれにもかかわらず、自由党がこの時点においてどこまでも不気味な存在であることはたしかであった。かれらの対応いかんによっては、ポールドウィンなど二度とふたたび立ちあがれない致命的打撃を受けるはずであった。ことはそれほど重大な要素をはらんでいたのである。

ところで、保守党内におけるポールドウィン打倒の画策の様相は、その後バークンヘッドの活発な裏面工作と党内外に大きな影響力をもつ最長老バルフォアの抱き込み成功によって、ほぼオースチン・チェンバレン派の思惑通りに終るかのようにであった。バルフォアは、二二年一〇月以前の体制に内心いまだに強い郷愁の念をいだく人物であった⁽⁴⁰⁾し、ポールドウィンの路線とは基本的に相容れぬ肌合をもっていた。だから、オースチン・チェンバレン派の人々は、国王からバルフォアに後継首班について下問がある場合に、具体的に「オースチン・チェンバレンに大命が降下されるべきであるむね進言」⁽⁴¹⁾してくるようかれに期待していたのである。バルフォアの一言はすべてを結着づけるはずであったのである。

しかし面白いことに、保守党内における反ポールドウィン派の動きは実はほかならぬこのバルフォアの突然の変心によって挫折する。「カールトン・クラブ集会」で、敢然オースチン・チェンバレン弁護の論陣をはりしかも敗北するとする苦い経験をもつバルフォアにとって、ここで再度ポールドウィンと対決するには、やはり前年一〇月の悪夢はあまりにも強烈であったのであろう。⁽⁴²⁾いずれにせよ、バルフォアが躊躇しかつ変心したと言う事実は、多くの人々が指摘しているようにダービーにことが敗れたことを悟らせ、ウォーシングトン・エヴァンズ (Worthington-Evans)

やジョンソン・ヒックス (Johnson-Hicks) などをボールドウィン打倒の企てから脱落させる決定打となった。⁽⁴³⁾ 一日、バルフォアがバークンヘッドに書簡を送り、連立内閣をつくるにはまだ「若干の時間と、大きな忍耐と、それに個人的な恨みの冷却化」⁽⁴⁴⁾が必要であると言いわけし、また同じ日にダービーに語って「首相の行なうべき憲法上の正しい手続きは、議会を開催し信任投票の結果を甘受することである」⁽⁴⁵⁾とその考えを表明したとき、オースチン・チェンバレン派の構想は瓦解したのである。

しかし、もとよりここで強調しなければならない点は、オースチン・チェンバレン派の画策の失敗は必ずしもかれらみずからの自壊にもとづくものではなかったと言うことである。それと言うのも、バルフォアが変心しかれら反ボールドウィン派がその動きをやめたのは、ボールドウィン支持派の党員がこのとき依然として党内に勢力を振っていたからであった。つまり反ボールドウィン派はその蠢動をむしろ否心なくやめざるをえなかったのである。一月一日の閣議開催の前後に続々と表明されたボールドウィン支持の動きは、⁽⁴⁶⁾そのことの有力な傍証となる。またたとえば、一月一〇日ダービーがスタンフォードハムに説明してボールドウィンに関しては「党内に非常に強い^{ビター・ファイ}反^{イリダ}発がある」と申したてたさい、逆にスタンフォードハムから質問されて「その反発は二三五名の下院議員すべてのものか」と聞かれてもかれは答えることができず、「それは下院における一部の人々の態度である」⁽⁴⁷⁾ことを示唆するにとどまらざるをえなかったこと、これなどもボールドウィンの背後になみなみならぬ勢力があったことを雄弁に物語ると言えよう。失意のボールドウィンには、かくて実は「カールトン・クラブ集会」のときと同様このときも⁽⁴⁸⁾一般議員の強固な意志がその背後にあつて、かれを最後の一线で踏ん張らせる支えになっていたのである。長老グループの野望が挫折したのは明らかにこのことにもとづいていた。それに忘れてならない事は、政治的に一般議員層

に立脚しながら、いわゆるボールドウィン派を構成した一群の指導者たちが、この時点において実にかたい結束を誇っていたと言うことであろう。それらは、言うまでもなくネヴィル・チェンバレン、J・C・C・ディヴィットソン、L・S・エイマリー、W・ブリッジマン(W. Bridgeman)、J・バード(Sir John Baird)などをさす。かれらこそ、一二月九日にボールドウィンにチェッカーズの公邸に呼ばれたさいごぞって首相を鼓舞激励し、かれに辞表撤回をせまり、状況のゆくえを逆転させる梃子となったのである。⁽⁴⁹⁾「われわれはいかなることが起ってもあなたと責任をとるに……。わたしはあなたが現在なさっているように党を団結させることのできる指導者を、あなた以外のほかに知らない⁽⁵⁰⁾」。ボールドウィンへの以上のような多様な声援とその迫力が、結局オースチン・チェンバレン派の人々をたじろがせるきわめて重要な原因となったのであった。

だが、この間の保守党の流れを変えオースチン・チェンバレン派の画策を粉碎したのは、やはりよく考えてみると窮極的には、「敗北の首相」ボールドウィン自身による不退転の決意であった。この点を看過することは決してできない。なるほどかれは、総選挙直後一時意気消沈し、数日のあいだは陰陰滅滅たる心境にあった。しかしその後すぐに勇気をとりもどし、少なくとも自由党に連立内閣の提案をすることなど、従来とってきたその政治行動からして考えられることではないと思いなおしたのである。このとき、ボールドウィンの見解を「恐らくはおうむ返しに繰り返して表明していた⁽⁵¹⁾」と言われるJ・C・C・ディヴィットソンは一二月一二日、ある書簡のなかでボールドウィンが言うであろうように次のようにいっていた。「わたしは単純な人間だが、つぎのことだけはわかる。すなわち自由党と保守党が原則をふみにじって、労働党の立憲上の諸権限をはばもうとするようなある種のいいかげんな(政治的)結合は(わが国を)革命へと踏みださせる第一歩となるものである⁽⁵²⁾」(カッコ内は引用者、以下すべて同じ)と。ボー

ルドウィンにとって、ことは現代保守党の基本的あり方にかかわるものであり、したがって決して譲ることのできない問題であるにちがいがなかったのである。保守党内閣が不信任されれば、代って野党第一党たる労働党が政権を担当するのは「憲政の常道」である。それに労働党はそのための正当な権利をもっている。だから、社会主義者に政権をゆだねるのもまたやむをえない。しかしもし、保守党と自由党が社会主義政権の誕生を阻止すべく安易に野合し、こうした原則を破るのであるならイギリスに政党政治はなくなってしまふ。かれはこう主張することに、みずからの政治的立場のすべてを投入していたのであった。⁽⁵³⁾

それに多くの歴史家が言及しているように、このときのボールドウィンには実際に労働党に政権の座をゆだねることなど少しも恐れているふうがなかった。大体、個人的にも「マクドナルドと親しい関係にあったボールドウィンは、マクドナルドが（イギリスの）^{コンステイネーション}国家構造の保持に心がけるであろうと言う点についてはかれを信頼していた」⁽⁵⁴⁾。さらにそのうえ、かれは労働党の掲げる「社会主義」についても、現実の社会的脅威と言う点からすればむしろロイド・ジョージ主義より幾分ましであるとさえ考えていたのである。⁽⁵⁵⁾ L・S・エイマリーがボールドウィンへの書簡のなかで切々と訴えて、イギリスの政党政治にとって自然な姿は建設的保守党と労働党による政局の運営であると主張していたように、⁽⁵⁶⁾ボールドウィンにとっても二大政党による政治運用のパートナーを労働党にもとめることは、――階級闘争を何らかの形で和解させ、すみやかに戦後社会の再建をはからなければならないと言うその基本的立場からして、⁽⁵⁷⁾ごく当然のことであった。だからこののちすぐに、二四年一月の議会で保守党内閣の下野が確定するさい、ボールドウィンはことさら自由党議席を無視し、労働党議員の議席だけをみて、イギリスの「将来は名誉ある諸君とわれわれ自身にかかっている」と自由党員にとっては大変気になる宣言をするのである。⁽⁵⁸⁾ いずれにせよ、右のようなボ

ールドウィン自身の状況に対する基本的認識とかれの断乎たる路線の方向づけが、党内「右派の中心勢力」の陰謀を消滅させる最後の一撃となったのである。これは疑えない事実であった。⁽⁵⁹⁾

「政治家」ボールドウィンにとって、一九二三年一二月の冒頭はこうして実に危機的な試練のときであったが、しかしかれはこの正念場によく踏みこたえた。⁽⁶⁰⁾このときの保守党内の抗争は、繰り返えし強調するまでもなく、決して単なる歴史の一エピソードとしてみすごされてよいものではない。ボールドウィン個人にとって、それは少なくともかれ自身の「哲学」をめぐる闘いであったし、また保守党全体にとって、それは現代社会への適合性の成否を卜する重要な局面であったからである。問題はあくまでも、選挙での敗北と言う事実をつきつけられて、保守党内における新・旧勢力が政策に関しても党の展望に関してもことごとく激突せざるをえなかったと言う点にあった。そして右に示した一連の抗争の結果は、ボールドウィンがいまかろうじて後者の、いわば旧態依然たる思想と行動を粉碎しつつあったと言うことを物語っているのである。

さて、こうして年があけた一九二四年一月八日下院議会が再開された。同八日、議会は議長にJ・H・ウィートリ (J. H. Whitley) を選出、翌九日と一〇日を宣誓などの儀式⁽⁶¹⁾にあて、一五日から実質審議をはじめた。⁽⁶²⁾保守党内の不穏な動きを押え、かつクリスマス休暇で十分に気力を養った⁽⁶²⁾ボールドウィンは、この再開議会において、一二月一日の閣議決定による方針どおり、一応はあくまでも保守党単独内閣を維持するが、しかし不信任を受け可決されるなら直ちに野に下る、と言う態度をとったのである。これは、考えてみると従来の政治的慣習とはまったく異なる新しい行動方針であった。と言うのも、かつていかなる政権も、選挙で敗れたさいには議会再開をまたずに直ちに辞任する、と言うのがこの国の一八六七年選挙法改正時以来とられた政治的慣習であったからである。⁽⁶³⁾それはともかくと

して、ポールドウィンは一五日の議会で保守党内閣の基本的な施政方針を示す「国王演説」(L・S・エイマリーの起草になる)を明らかにし、繰り返し返えしその政策的立場の正しさを訴えたのであった。

「国王演説」が表明された二日後の一月一七日、大方の予想通り労働党を代表してJ・R・クラインズ(J・R・Clynes)が保守党内閣に不信任案(「国王演説」修正動議)をつきつけた。下院の議場においてJ・R・クラインズが発言をおえるや、すかさず自由党のアスキスが発言し、右の不信任案に賛成の演説をした。「すでにわたしが明らかにしたように現政権の正当な、かつ適切な継承者は現在の条件のもとでは労働党である⁽⁶⁴⁾」と言って、アスキスはなかなか定まらぬ自由党の立場をついに「労働党政権」の承認と言う形で議会の内外に表明したのであった。このアスキスの態度表明については、オースチン・チェンバレンが討論最終日に激しく批判して、これによって「かれは自由党の白鳥の歌をうたったのだ⁽⁶⁵⁾」ときめつけアスキス自身の没落を予言する。しかしアスキスがこうして旗幟を鮮明にしたことは、状況のゆくえをもう決定したようなものであった。しかしなお議場ではJ・R・クラインズ演説とこのアスキス演説をめぐって激しい論戦がつづけられていた。

不信任案は一月二日に採決されるはこびになった。この間ポールドウィンはいささかも士気沮喪してはいなかった。T・ジョーンズの観察によると、二一日当日もポールドウィンは述べて、「わたしはこんなにいい気分であるのを長い間味わったことがない。(これから始まる)演説ではいささか品を落して発言せざるをえないな⁽⁶⁶⁾」などと上機嫌であった。とくに演説では、詩人ドライデン(Dryden)からの引用をもち込んでマクドナルドをやっつけるのだとくすくす笑っているポールドウィンをみて、T・ジョーンズは「かれが演説を前にしてこんなにもはしゃいでいるのを今まで見たことがない⁽⁶⁷⁾」と安堵の胸をなでおろしたのである。同日、夕刻行なわれたポールドウィンの演説はそれ

ほど長いものではなかった。しかしそれは保守党政府の正しさを弁明するものとして十分なものであった。⁽⁶⁸⁾かれは主張して、わが政府は過去何もしていないと批判されたがしかしそれは事実には反する、といった。すなわち、われわれは対アメリカ債務の解決、若干の減税、国際協定の維持、トルコとの条約締結、タンジール (Tangier) 問題の解決、そしてアメリカとの関係の修復に成功した。賠償問題、フランスとの関係、それに失業問題など若干の残された課題はあるとしても、それ以外のほとんどすべての懸案事項を一掃してしまった。だから「かりに今夜(この議場において)敗れるとしても、われわれはわれわれに取って代るであろう次期政権に何ら未解決の問題も残していない⁽⁶⁹⁾」。ボールドウィンはこう言って胸を張ったのである。もっとも、ボールドウィンのあと幾人めかに発言したマクドナルドの皮肉たっぷりな反論によれば、保守党政権を今夜のような事態に陥し入れた凶元の一つは、ボールドウィンの言う若干の「残された問題」にこそあった。⁽⁷⁰⁾その意味では、たしかにボールドウィンの発言はあくまでも強弁であると言う誇りをまぬがれるものではなかった。しかしそれにもかかわらず、かれが現職の首相として自己の政治的立場を弁護するのに、最後まで全力を傾注したことは誰しも認めるところであった。いずれにせよ、同夜 J・R・クラインズの提起した不信任案(「国王演説」修正動議)の採決の結果は、予想にたがわず賛成三二八票、反対二五六票で可決された。その差は七二票であった。⁽⁷¹⁾

翌一月二二日、ボールドウィンは参内して辞表を提出した。同日正午かわってマクドナルドがバッキンガム宮殿に招かれた。この日をむかえ、国王ジョージ五世はこの国の繁栄の時代を築いた栄光のヴィクトリア女王に思いをはせた。かれは感慨の言葉を日記につらね「二十三年前の今日、祖母が死んだ。労働党政府を祖母はどう思っただろう!」⁽⁷²⁾と書いた。しかしともかく、マクドナルドの国王の手への接吻をみて、ここに名実ともにイギリス政治史上は

つの労働党首相が誕生したのである。これより四日後、ボールドウィンは首相官邸をさった。ボールドウィンが官邸をさる日、ダウニング街一〇番地に奉職する職員は全員整列してボールドウィン夫妻を見送った。この日の出来事は、社会主義政党にもチャンスを与え政権を握らせるべきであると言うボールドウィンの政治信念の発露の結果としてもたらされたものであったとは言え、しかし現職の首相の公邸からの退去は、やはり誰れがみても物悲しい光景であった。⁽⁷³⁾

三 党再建への摸索

マクドナルドは、一月二二日の夜「労働党政府」の主たる閣僚名簿を公表した。前年クリスマスに、生れ故郷であるスコットランドの小漁港ロシマウス (Lossiemouth) にひきこもり、この日のくることを予想してひそかに組閣の構想をねっていたかれは、⁽⁷⁴⁾ それでも大変な苦心のすえにようやく新政府の陣容を固め、いまそれを国民の前に明らかにしたのであった。その顔ぶれは、マクドナルドが首相と外相を兼任したほか、蔵相にP・スノーデン (P. Snowden)、⁽⁷⁵⁾ 国璽尚書にJ・R・クラインズ、植民地相にJ・H・トーマス (J. H. Thomas)、⁽⁷⁶⁾ 商務相にS・ウェッブ (S. Webb)、そして内相にA・ヘンダーソン (A. Henderson) などを配したものであった。⁽⁷⁵⁾ もとよりこの内閣は多くの人々が指摘するように、かならずしも危なげのない内閣であるとは言えなかった。首相マクドナルドの孤独癖の強さ、ほとんどの閣僚が大臣未経験者であったこと、それにこの内閣が実は二名の保守党员と五名の元自由党员をふくむ混成集団であったことなど、⁽⁷⁶⁾ 敵にも味方にもそれぞれ非常な不安感を与えていたからである。しかしそれでも、はじめて台閣に

列せられた労働党の指導者たちが、このときみなひとしく同志愛に酔い、喜びと自信にみちていたのは事実であった。大臣就任式を終えてもどったかれらは、「革命家のウィートリー（保健相）が両ひざを屈してひざまずき国王の手に実際にキスしたそのおかしさを笑い……労働党が政権を握ったのを冗談ではないのかと言ってみな笑いあっていた⁽⁷⁷⁾」のである。とにかく、こうして新しい政治状況が始まった。

ところで、「野党」党首ボールドウィンの直面した緊急の課題は、保守党内におけるその指導権をあらためていかに確保するかと言う点にあった。なるほどかれは、社会主義者への政権譲渡を決意し、しかもその実現を平和裏のうちにすると言うイギリス政治上前例をみない快挙をなした。その点に関するかぎり、党内の反ボールドウィン派は結局はみな沈黙し、不承不承ながらもかれのリーダーシップに服さざるをえなかったのである。しかし言うまでもなく、ボールドウィンはこれで党内の指導権を全面的に確立したと言うわけでは毛頭なかった。ビーヴァブルックが二月一七日に『サンデー・エクスプレス』(The Sunday Express) に書いて、ボールドウィンと言う人は、たとえば次官職ぐらいのちっぽけな地位にふさわしい人物であるとしても、「首相であるとか野党々首であるとかのレベルにははるかにおよばない⁽⁷⁸⁾」人間だと挑発しつづけたように、党内にも外にもなお依然としてボールドウィンに代る指導者の出現を願う人々がひしめいていたからである。

そこで、ボールドウィンのなすべきことは、一にも二にも、「カールトン・クラブ集会」以後ことごとく自分の前に立ちはだかつてきた党内の政敵をいかに宥和するかと言うことにあった。別の表現をもちいれば、党内に潜在する党分裂の動きを克服しいかに早急に拳党体制を構築するか、これが自己の政治生命を制する最も重要な課題としてかれの前に横たわっていたのである。もとよりこれは、なまなかのことで解決できる問題ではなかった。ことにボールド

ドウィンは、一九二三年の首相就任当時より総選挙時にいたるまでたえずオースチン・チェンバレンに協力を要請していたけれども、しかし色好い返事をもらえないと言う苦い思いを嘗めさせられてきたからである。⁽⁷⁹⁾だが結論から先きに述べると、かれはこの難事に打ち勝った。ポールドウィンは事態解決の最後の鍵をオースチン・チェンバレンの弟であるネヴィル・チェンバレンの斡旋にもとめ、かろうじて宿敵との和解に成功したからである。二月五日、N・チェンバレン邸でチェンバレン兄弟とかれの三人だけで会食したおり、率直にオースチン・チェンバレンに政治協力をもとめたポールドウィンは、ついにオースチン・チェンバレンの「陰の内閣」への参加と野党側フロント・ベンチへの着席の約束をえたのであった。⁽⁸⁰⁾

ポールドウィンが党内反主流派の譲歩をかちえ、急遽かれらの統合に成功した理由の一つは、ネヴィル・チェンバレンの斡旋の動きもさることながら、ポールドウィンの反主流派への呼びかけが結局はオースチン・チェンバレンなどの政治的思惑とも合致したからであった。オースチン・チェンバレンはもはやここに至っては自由党との野合は不可能であり、したがってみずからの政治的延命をはかるため党中央に復帰するのをもまたやむをえない、と現状を認識していたのである。⁽⁸¹⁾保守党と自由党からなる「連立内閣」により反社会主義陣営を構築すること、そしてそれによって混乱の時代に対処すること、これはかれが戦後一貫して追求してきた政治路線であった。⁽⁸²⁾だが、一月一七日の下院におけるアスキス演説たるやこうしたかれの意志に逆振をくわせ、自由党の社会主義政党への協力と言うオースチン・チェンバレンにとっては実に唾棄すべき結果をもたらしたのであった。状況は大きく転換した。オースチン・チェンバレンは当然のこととして、党内反主流派の指導者たち、すなわち最後までポールドウィンに抵抗し党内穏健派の輦轡をかついていたバークンヘッドなども、⁽⁸³⁾みなこのことを思わなければならなかったのである。ポールドウィン

との妥協が可能となるゆえんであった。

したがって、ボールドウィンがN・チェンバレン邸でオースチン・チェンバレンと晚餐をともにした翌々日、つまり二月七日に開かれた「陰の内閣」は、このようにして妥協に応じた人々をふくめ保守党指導者の重立った人々がみな一堂に会したと言う意味において、党首ボールドウィンにとっては画期的な政治会合となった。⁽⁸⁴⁾この日の「陰の内閣」には、第一次ボールドウィン内閣の元閣僚全員(ただし出席を拒否したR・セシル R. Cecil を除く)⁽⁸⁵⁾とそれに加えてバルフォア、バークンヘッド、オースチン・チェンバレン、クラフォード(Earl of Crawford and Balcares)などの参会をみた。まさしくこれは指導者たちの超党派的な集りであると言えたのである。⁽⁸⁶⁾ただ同日、ボールドウィンは終始控え目に振舞った。会議の率領もすべてオースチン・チェンバレンにまかせた。⁽⁸⁷⁾また政策的にも保護貿易政策の撤回を約束するなど——これはボールドウィン派のL・S・エイマリーやW・ブリッジマンなどの不満とするところであったけれども——⁽⁸⁸⁾大変な譲歩をした。しかしその代償として、かれは繰りかえすまでもなく人々に自己の指導権の確保を承認させたのである。戦後うちつづいた党の混乱にこれようやく一応の終止符が打たれたことは言うまでもなかった。⁽⁸⁹⁾ボールドウィンは野に下ってたたか成長しつつあるようであった。

四日後の二月一日、さらにボールドウィンはホテル・セシルにおいて総選挙後はつの党大会を開催した。かれは、この大会をみずからの党首としての地位を公的にオーソライズし、一二月以来の党内における自己の努力の成功を確認する記念碑的な大会としたのである。大会は‘For He’s a Jolly Good Fellow’の合唱をもって開幕した。大会冒頭、ボールドウィンは結集した党の上・下両議員とさきの総選挙で落選した人々を前に、およそ三〇分にわたり基調となる演説をした。⁽⁹⁰⁾演説でかれは、総選挙の敗北の反省を前提としつつ、(1)保護貿易政策の放棄(2)労働党と対決しう

る組織構築の必要性(3)社会改革の積極的な推進などの諸点を強調した。⁽⁹¹⁾ ボールドウィンはおおよそ次のように言ったのである。いささか長い引用になるが、以下その要旨を述べてみよう。

……さきの総選挙においてわれわれは有権者の前によかれと思う諸提案を示した。しかしこれは人々によって拒絶された。この有権者たちの判断が一体何であったのかを解釈することは、有権者たちが敵の術中におちいつていたと言うこともあるからして大変に困難なことである。だが「全体としての国民が、一般関税の創設をふくむ財政システムの変更をもたらそうとするわれわれの中心的な提案に、ある意味で敵対的な決断をしたのだと言うこと……このことを結論として申しあげることにはわたくし自身あらがうことはできない。それゆえ、こうした情況においても一度党に対して、国民の前に一般関税の提案をすべきであると勧告することが正しいことだとは、わたくしには思われないのである」。もとより、帝国特惠関税の原則を維持し、産業保護法 (the Safeguarding of Industries Act) のそれに比肩しうる権限をもって、個別的産業保護政策の堅持にあたるべきことは言うまでもないのだが……。

……ところで、われわれの将来の敵は自由党などではなく、まさしく労働党である。しかも労働党は今日きわめて生氣あふれており、われわれも同様の活力を保持しなければ敵に打ちかつことなど望むべくもない。諸君のなかには労働党はボルシェヴィズムだから……とキメつけて片付ける人もおられるようだ。しかしそれはすべてを説明することにはならない。むしろ労働党が次の二つの源泉によって日々その強さを生みだしていることに注目する必要があるのである。一つはかれらのなかに、自分たちの政策の正しさを信じながら、「自分たちの仲間のためよりよい条件をつくろうとして全身全霊をささげようとする」そうした種類の人々がきわめて多く存在す

ると言うことである。「この党の多くの活動家たちが、給料や報酬なしに投票勧誘や宣伝や選挙活動のあれこれに挺身しているのはこの心持による」。つまりわが党も、この精神こそを学びとらねばかれらを打倒することなどできないと言うことなのである。二つめは組織に関連している。すなわち、ちょうどかつて中世の教会が社会の下層部にいる人々にも権力に到達させる一つの道筋の役割をはたしたように、そのように今日、「労働党は下層社会にあるけれどもしかし知力を有し行動力も有すると言う人々に、自治体の活動や政治活動を重ねれば次第に議会入りをとげ大臣にまでもなりうるのだ、と言うそうした望みをいだかせる一つの組織となっているのである」。この点が重要なのである。われわれ自身も、さらにこうした一つの道筋を示しうる組織をもち人々に希望をいだかせる必要があると言うことなのである……。

考えてみると、保守党こそは伝統的に労働者階級の生活向上を目的として掲げ、そのために闘った唯一の政党であった。その点において自由党などは、いわれわれの驥尾に付してにすぎなかった。ディスプレイが社会問題の解決を呼号していたとき、かれらはことの重要性を理解できなかったのだ。われわれがふたたび国民の信頼をかちえ権力に近づく方法は、もう一度この党の伝統を実践にうつすことにしかない……。そこでわたくしは、とりあえず大戦後派生した緊急の問題に対処すべく、この二・三ヶ月以内に党が党外の専門家の力もかりて住宅・教育・労使関係など社会問題を検討する機会をもうけるべきであると強く主張する。……「わたくしは、いまわれわれの目の前に現われた新時代に勇氣と洞察力をもって立ち向う、生き生きとした進歩的かつ団結する党について諸君に語りたいと思うのである。もし党がこうした精神に導びかれるのなら、もし党がいたずらに過去を振りかえるのでなく将来をみつめるのなら、そしてもし党が団結し、批判する前にむしろ何事かをなそうと

するのであるのなら、国民はそうした保守党のあり方を是認するであろうし、さらに長い栄光ある歴史において培ってきた以上のもっと偉大な名譽ある足跡を、われわれが刻することになるであろうとわたくしは確信するの⁽⁹²⁾である」。……………

このボールドウィン演説のすぐあと、会場では演説に感激した長老バルフォアが——しばしば反ボールドウィンの動きを示してきたあのバルフォアが——発言をもとめた。バルフォアは、党が大会の名においてボールドウィンを信任し、党首の設定した政策方針に同意すべき決議案を上程したのである。⁽⁹³⁾ つづいてオースチン・チェンバレンが——党内における反ボールドウィン勢力の中心的人物であったオースチン・チェンバレンが——発言した。かれもまたボールドウィンへの忠誠を披瀝して言った。「党首ボールドウィン氏によって明らかにされた党の政綱と偉大な黨員バルフォア卿によって提起された決議案をわたくしは心底より受け入れたい⁽⁹⁴⁾」。こうしてすべてに決着がついたのである。野党指導者ボールドウィンとかれの率いる保守党は、ここによりやくその新しい一步を踏みだすことができたのであった。

さてこの間、当初その前途を危ぶまれていた「労働党政府」は、予想に反して順調なすべりだしをみせていた。マクドナルドは、周辺に内閣官房長官M・ハンキー(M. Hankey)や元自由黨員のハルディーン(Lord Haldane)など実務に精通した人々を配し、危なげのない仕事ぶりを始め人々を安堵させていた⁽⁹⁵⁾のである。大体、マクドナルドにしてみればこの局面ではいたずらに急進主義的政策を掲げ大胆な行動にでるなど考えられることではなかった。と言うのも、この内閣の経験を通じて労働党を一挙に「統治政党」たらしめ、さらにそれを通じて同党を保守党とともに二大政党制を担う責任ある政党であると国民に印象づけること、これがこの時期のマクドナルドの政治行動を導びく一

貫した指針であったからである。⁽⁹⁶⁾ その意味で、マクドナルドは同政府の維持・運営にその情熱のすべてを傾注していたのであり、ここはかれにとっても政治的抱負を実現するための負けられぬ場面であったのである。

とは言え、保守党側からみれば、これほど組みしやすい政府もまたなかったと言えよう。たしかに、社会主義者たちの手による「政府」は次第に人々に受け入れられつつある。しかしそうは言っても、それは絶対的な少数政権である。そのうえ同政府を側面から支えるべき自由党は政府への姿勢に関して実際にはいまだに及び腰的である。したがって同党下院議員団については、その議席数を額面どおりに評価する必要は必ずしもない。これらに反して、保守党は院内で最大の勢力を擁しており、しかもいま党内の足並みをほぼ完全にそろえ挙党態勢をとっている。だから、保守党からすればときには議事妨害などの厭がらせもできるし、またときには楽々と敵勢力の分裂を企てることもできる、などと言う意味において状況はきわめて好都合な条件の下にあったのである。⁽⁹⁷⁾

しかし政治的に再出発するにあたり、党首ポールドウィンはそうした風潮にはのらなかった。いたずらに政府を愚弄することに愉悦を感じると言った安易な態度を、少なくともかれ個人は決してとらなかつた。逆にポールドウィンの行なったことは、右にみた二月一日の発言どおり、みずからを戒めひたすら地道に党の再建策をはかろうとすることであった。換言すれば、いまやっとな党内の主導権を掌握したかれは、次の行動として、なによりも正攻法で敵を負かすことのできる強固な党組織の確立を急ごうとしたのである。この点が重要なのである。この党「組織」の再建と言う問題に関しては、すでに二三年の総選挙の直後、幾人かの党指導者たちがポールドウィンに事の重要性を指摘していた。またさきに示した二月一日の党大会でもオースチン・チェンバレンがはっきりと「党組織の不完全性」について明言していた。⁽⁹⁸⁾ したがってこれの解決はいずれ党にとって避けられぬ大きな宿題であった。しかし言うまで

もなく、責任をもってこの組織改革に着手したのは、この時点におけるボールドウィンであったのである。具体的には、かれの意をうけてたちまち行動に移ったネヴィル・チェンバレンやL・S・エイマリーやJ・C・C・ディヴィットソンなどであった。⁽⁹⁹⁾ いずれにせよ、党大会以後ボールドウィンのみせたこれがはじめての政治行動であった。野党々首としてかれはきわめて禁欲的なスタートを切ったと言えよう。

「組織」再建に関して、ボールドウィンが留意した点は、大雑把に言うところ、いかにして各種党員の政策立案能力をたかめる体制を築きあげるか、またいかにして党が次期政権の担い手として充分な態勢にあることを内外に示すか、と言う点におかれた。それらの具体的内容については幾つかの特徴があるであろうが、さしあたり次のようなものとして指摘される。

まず(i)「陰の内閣」^{シヤドー・キャビネット}に直属する事務局の設置。これにより、以後政策立案にあたり党指導者、党組織、下院議員団、新聞などの意志疎通をはかる事務体制を確立し、政策立案のための調査準備を円滑にできるようにした。⁽¹⁰⁰⁾ ボールドウィンは、労働党「政府」に対抗すべく「陰の内閣」の飛躍的な強化をはかったのである。同事務局長にはボールドウィンの秘書であったL・ストー(Lancelot Storr)を配し、⁽¹⁰¹⁾ そのもとにU・ロイド(Geoffrey Lloyd)やR・ブースビー(Robert Boothby)など若手党員をスタッフとして加わらせた。つぎに(ii)それぞれの陰の大臣に属す政策委員会の設置。これは下院議員とかれらを助ける外部の専門家によって構成されるものとした。ここにおいて、党ははじめて各政策を具体的に積み重ねることができたのである。のち同年六月に公表する政策綱領『未来をみつめて——保守党の根本方針と目的』(Looking Ahead: Unionist Principles and Aims)は、すべて右の政策委員会の作業の集計にもとづくものであった。⁽¹⁰²⁾ さらに(iii)「一九二二年委員会」と党指導部との関係強化。ボールドウィンは、

「院内保守党全体の共鳴板」として次第に現代的装いを帯びてきたバックベンチャー組織「一九二二年委員会」を党内で正当に評価し、かれらの代表と積極的に会い、さらに同委員会の会合に定期的に院内幹事を派遣した。両者の意志疎通と関係強化が意図されたのである。⁽¹⁰³⁾ 他方、院外関係についてみると、そこでは(iv)党中央事務局の改革があげられる。これは二三年総選挙の敗北と責任と言うこともあり、人事移動の断行によって事務局体制の刷新をはかろうとしたことをさす。すなわち、ボールドウィンはかねてより問題のあったR・ホールを^{プリンシパル・エグゼクティブ}首席幹部書記の職から解任、代って若くして有能なビジネスマン、H・ブレイン (Herbert Blain) を就任させた。(ただし院内幹事長のエリス・モンセール Eyres-Moncell と党組織会長の^{パーティ・マネージャー}S・ジャックソンは留任) H・ブレインの指揮のもとに、中央事務局は各政策の調整、八〇〇万部のリーフレットの配布にみられるような活発な宣伝活動、それに党書記・活動家たちの掌握とかれらの弱体選挙区への派遣など、次々と精力的な活動を展開したのである。⁽¹⁰⁴⁾ そしてさらに(v)地方組織における財政的自立の追求。これは従来、地方組織が財政上個々の裕福な国会議員の寄付にたよっていたのを以後党費によってまかなうことのできる健全な組織にしようとした猛運動をさす。もとよりこれの実現はなかなか困難であった。しかし少なくともボールドウィンは右の党改革の一環としてこの地方組織の近代化と言う課題に大きな意欲を示したのである。⁽¹⁰⁵⁾ 以上であった。

みられるように、ボールドウィンは院内にあっては「陰の内閣」を強化しさらに政策委員会を設置することによって労働党「政府」を陵駕しうる体制をつくろうとした。また院外にあっては中央事務局を整備し地方組織の改革をはかり、党を全体として戦える体制に移行させようとした。これで一応の組織再建のルールが敷かれたのである。これより党は充分に国民の支持を調達することができるし、また次の選挙でも必ずや勝利をおさめることができるにちが

いない。数をたのみ、いたずらに院内を混乱に落し入れると言うな姑息な方法をとらず、これより党は正々堂々と政権を奪還する道をあゆむことができるにちがいない。これが逆境にあるボールドウィンの示した行動の軌跡であったのである。

こうしてみると政治家としてのボールドウィンの問題意識は、党が野にあると言う時期にこそ内部の徹底的な近代化を進めなければならないと言ふことにあったことがわかるのである。言い換えると、これまで党内の団結をはかることに呻吟し、自己の指導権を確立することに腐心してきたボールドウィンは、それをのりこえ、いまさらに組織の改革を通じ党を近代的な「政策政党」たらしめようと奮闘しはじめたということなのである。かれは後年ふりかえり「わたしは野党の指導者としてはダメな人間であった」と述べた⁽¹⁰⁶⁾、と言われている。しかしかれの一連の政治行動を右のようにみえてくると、それはやはりかれがこのとき現実政治家として非常な成熟ぶりをとげていたことを示しているようである。党内各派の融合をはかり団結をかちえたのは、なによりもかれが練達の政治家として成長していたからであった。またボールドウィンがどこまで自覚していたかは別として、かれのこの時期の行動は、やはりかれがイギリス保守党の「近代化」の歴史的な推進者であったことを如実に示しているようである。従来誰れも手をつけなかった組織改革はボールドウィンにしてはじめて可能であったからである。しかも重要なのは次の点であろう。すなわち、こうしたボールドウィンの政治的努力のすべては、やがて二大政党制下における一つの「野党モデル」の構築につながるにちがいないと言ふことである。敗北の保守党が近代化をすすめ装いを新たにして国民を魅了することに成功するとすれば、それは期せずして、現代社会における野党たるものいかにあるべきか、と言ふことをさし示す格好のモデルとなることができるからである。このようにボールドウィンの政治行動にふくまれる含蓄ははなはだ大きい

い。しかしこれらの点の評価に関しては、いまここでは拙速を避けることにしよう。なぜならボールドウィンは、現実政治のなかでなお大変な苦闘を重ねているのだから。(未完)

- (1) Cf. H. Montgomery Hyde, *Baldwin: The Unexpected Prime Minister* (1973) p. 195.
- (2) Thomas Jones, *Whitehall Diary* Vol. 1 1916-1925 (1969) p. 259 Cf. H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 196.
- (3) Chris Cook, *The Age of Alignment: Electoral Politics in Britain 1922-1929* (1975) pp. 114-120.
- (4) C. Cook, *Ibid.*, p. 120.
- (5) Cf. C. Cook, *Ibid.*, pp. 150-151, Richard W. Lyman *The First Labour Government 1924* (1957) pp. 31-32.
- (6) C. Cook, *op. cit.*, pp. 152-153, R. W. Lyman, *op. cit.*, p. 32.
- (7) ボールドウィンが下院で安定多数を有していたにもかかわらずなぜ総選挙に訴えたのか、と言う点については依然として謎的要素が多い。しかしこの点については、たとえばM・カウリングが次のような四つの理由をあげてやや詳しく説明している。それによれば(一)このまま議會を解散しなければ自由党、労働党それに保守党内の自由貿易派に包囲されて、政府は早晩少数派に転落してしまうであろう、と考えた保守党幹事長の判断に、ボールドウィンが影響されたのではないかと考えられることである。もっとも、このような解釈については十分な裏づけがえられない。しかし少なくともこうした要素を無視することができないのはたしかだ、とM・カウリングはまず言う。(二)つぎに考えなければならないのは自由党の動向に関する。これについてはボールドウィンがつぎのように情勢分析をしていた、とみなすことが重要だと言う。すなわち自由党はたとえ「統合」を成功させてもいまだ選挙戦を戦えるほど充分な態勢をとっていない。だからこの際できるだけ早く選挙をした方が有利であると。ただこれについてもボールドウィンの分析がどの程度のものであったのかはいまだにそれほど明らかではない。しかし少なくとも、アスキスとロイド・ジョージが「統一綱領」を作ってしまったあとより、その前に戦いをいどんだ方が保守党にとって有利であったのは確かなので、この点も有力な根拠となるのは事実である。(三)さらに無視できないのは、ボールドウィンが選挙になれば必ず勝つと確信していたとみなすことである。これについては一部の党官僚たとえばR・ホール(Sir Reginald Hall)やS・ジャクソン(Stanely Jackson)の判断とそれにボールドウィン周辺にあって影響力のあるJ・C・C・ディヴィットソンの判断が非常に大きな比重を占めていた、と言うことである。(四)そして最後に問題となるのは、当時ボ

ールドウィンの背後にあってそれを支えていたL・S・エイマリー(L. S. Amery)やN・チェンバレン(N. Chamberlain)とポールドウィン自身の間関係が、総選挙におおいに関係していたとみなすことである。すなわち、エイマリーやN・チェンバレンは強固な保護貿易主義者であり、かれらが先きばしつて何らかの行動にうつると言うことは充分に考えられた。そこでポールドウィンにとってはこの動きを評価することなくかれらを切ってしまうか、それとも指導者として逆にかれらの先頭にたち保護貿易政策を掲げ総選挙を断行するか、そのどちらしかなかったと言うのである。この最後の理由は当時のA・ゲデイス(Sir Auckland Geddes)の見方でもあり、カウリングはこれについてはいさぎやかな懐疑的であるが、いずれにせよかれは以上の四つをあげ、ポールドウィンが総選挙にふみきつた理由としているのである。Cf. M. Cowling, *The Impact of Labour 1920-1924* (1971) pp. 325-329.

このM・カウリングの解釈はそれぞれ説得力のある説明の仕方であり、これを論駁するのは実際にははなはだ困難であると思われる。ただ筆者としては、ポールドウィンの総選挙断行の理由は、基本的にはM・カウリングのふれなかった点、すなわちかれの政治家としての権力欲にあったとみる考えをとりたいと思う。こゝした解釈についてはCf. J. Campbell, Stanley Baldwin in J. P. Mackintosh, ed, *British Prime Ministers in the Twentieth Century*, (1977) Vol. I p. 193, 197 など。これに関連してポールドウィンが自分の「首相」としての立場の不安定性につねに悩んでおり、結局これを払拭するのは総選挙しかないと思ひ込んでいたことも忘れてはならないであろう。この点についてはJ・C・C・デイヴィットソンの証言もある。Cf. Robert R. James *Memoirs of a Conservative: J. C. C. Davidson's Memories and Papers 1910-37* (1969) pp. 186-187 筆者が右のような解釈をとりたいゆえんである。もとよりM・カウリングのあげた四つの理由が、以上に複合的にかんでいたことは言うまでもない。

(8) ポールドウィンがロイド・ジョージの機先を制するため積極的に「保護貿易政策」を打ちだしたとみる見方は、今日ではいわば「通説」となっており、多くの人々が指摘している点である。当時、終始ポールドウィンのそばにあったトーマス・ジョーンズもこれを裏づける日記をのこしている。かれによればポールドウィンが「保護貿易政策」を決断したのはロイド・ジョージがアメリカ旅行で大成功をおさめたことにショックを受けたからであって、ポールドウィンやJ・C・C・デイヴィットソンなどは、とにかくこれに対抗して何か劇的で、かつ決定的な政策転換をしなければ帰国後のロイド・ジョージにしてやられてしまうのではないかと焦躁にかられていた、これがかれらに保護貿易政策をとらせたのではないかと言うのである。そ

れにボールドウィンやJ・C・Cディヴィットソンなどは、たとえ保守党が「保護貿易政策」を掲げても、かくも深い分裂下にある自由党がよもや統合するやうなことはあるまいともみなしていたと言ふ。ボールドウィンが判断を誤った瞬間であった。 Cf. T. Jones, *Whitehall Diary*, Vol. 1 p. 261 など。ボールドウィンが保護貿易政策にふみきった経緯と当時のかれの心境などは、J. Jones, *Whitehall Diary*, Vol. 1 pp. 181-185 L. S. Amery, *My Political Life*, Vol. II (1953) pp. 280-281, J. Campbell, *Lloyd George: The Goat in the Wilderness* (1977) p. 47. など、を参照のこらう。

(6) Quoted in H. M. Hyde *op. cit.*, p. 182.

(10) 右に示した注(7)の(3)を参照されたらう。

(11) Cf. W. Stead, *The Real Stanley Baldwin* (1930) p. 15 またボールドウィンの性格や風貌については、たとえ A. W. Baldwin, *My Father: The True Story* (1956) p. 99 以下を参照。

(12) Harold Macmillan, *The Past Masters: Politics and Politicians 1906-1939* (1975) pp. 107-108.

(13) J. Ramsden, *The Age of Balfour and Baldwin 1902-1940* (1978) p. 208.

(14) J. Ramsden, *Ibid.*, p. 207.

(15) C. Cook, *op. cit.*, p. 123.

(16) 以上 F. W. S. Craig, *British Electoral Facts 1885-1975* (1976) pp. 11-13 参照。

(17) 詳しうは C. Cook, *op. cit.*, pp. 145-147, R. W. Lyman, *op. cit.*, pp. 53-54 など、を参照。

(18) Cf. *The Daily Mail* 8 December 1923.

(19) たいへん *The Daily Mail* 8 10 December 1923.

(20) Keith Middlemas & John Barnes, *Baldwin: A Biography* (1969) p. 259, Kenneth Young, *Stanley Baldwin* (1976) p. 55. なおオリヴァーはのち一九二九年頃になるとマルクス主義から「やや軟化し」、労働党候補者として父の選挙区に隣接するダートレー (Dudley) から立候補し当選する。したがって第二次労働党政権下では父スタンリーと息子オリヴァーは議会の議席でそれぞれ与・野党にわかれ面と向って着席し対決することになるわけである。スタンリーの妻ルーシー (Lucy) は議会の傍聴席からこれをみていつも悲しみにふれて、いたと言ふのじやないか。 K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, pp. 259-260.

(21) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 260 K. Young, *op. cit.*, p. 56.

- (22) T. Jones, *Whitehall Diary* Vol. pp. 258-259.
- (23) 以上 H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 196 や *Whitehall Diary* Memorandum by Lord Stamfordham 8, 10 December 1923 in Randolph S. Churchill, *Lord Derby 'King of Lancashire'* (1959) pp. 551-552
- (24) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 196, R. S. Churchill, *op. cit.*, pp. 550-551.
- (25) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 197.
- (26) H. Nicolson, *King George V: His Life and Reign* (1953) pp. 382-383.
- (27) *The Liberal Magazine* January 1924 p. 63.
- (28) *The Times* 12 December 1924.
- (29) そうした波紋の輪の一つは、当然のことながら以上のような事態の推移となによりも「首相」ボールドウィンに対する猛烈な反発となって噴出した。たとえば、保守党系の『デイリー・メール』(*The Daily Mail*)などは、この一二月一日の閣議決定前後から翌年一月実際に労働党が政権をにぎる瞬間まで、「いわばなりふり構わず社会主義の恐怖をあおり、「労働党政府」誕生の可能性に対する不安をかきたてたのである。すなわち、「ロシアでケレンスキーがすぐにトロツキーやレーニンに放逐された」ように、「労働党に政権をまかせたとしてもかれらはただ共産主義者を擡頭させるための露払いの役割を演ずるだけである。つまり労働党に権力を握らせると言うことは、イギリスにおいて「流血革命の序曲」を開始すると言うことを意味するのであって (*The Daily Mail* 5 January 1924) ボールドウィンは結局「自殺に等しいコース」を選択したことになるのである。 (*The Daily Mail* 11 December 1923) たとえば『デイリー・メール』はこう主張したのである。同様の考えは、さらに一三年の選挙で落選の憂き目をみた「実力者」W・チャーチル (W. Churchill) などによっても強力に表明された。たとえばかれはのちに二四年一月一日『タイムズ』紙上に書簡をのせ、「それほどたいして切実な理由もないのにこのように危険であることがはっきりしている状況をつくらなければならないと言うのは驚ろくべきことである」 (*The Times* 18 January 1924) といひ、「激しい言葉をつらねて世間へ注意を喚起した。こうして、反社会主義勢力が次々とうちだす危惧表明は、明らかに人々の未知への不安を醸成したのである。もとより当時、政治家のなかにもマスコミのなかにも事態をあくまで冷静に受けとめようとする人々が数多く存在したのは事実であった。しかしボールドウィンの投じようとした一石は、大勢としてはやはり一九二三年の暮から一九二四年の冒頭にかかるイギリスの政界を、あたかも一種のパニック状態におとし入れ

ちがうところだったのである。(以下参照) R. W. Lyman, *op. cit.*, pp. 81-82, C. Cook, *op. cit.*, p. 181 (以下を参照)

(30) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 251.

(31) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 251 K. Feiling, *Life of Neville Chamberlain* (1946) p. 111.

(32) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 251.

(33) 以下参照 K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 251.

(34) M. Cowling *op. cit.*, p. 332 以下「バーナム・メン」の時点における社会主義への嫌悪と労働党「政府」が行なうべき無茶苦茶の恐れのかれの恐怖の念に促して Memorandum by Lord Stamfordham, 10 December 1923 in R. S. Churchill *op. cit.*, p. 553 参照。

(35) Cf. M. Cowling, *op. cit.*, p. 333.

(36) 以下参照 M. Cowling, *op. cit.*, pp. 332-333.

(37) C. Cook, *op. cit.*, pp. 184-185.

(38) *The Liberal Magazine* January 1924 p. 20.

(39) 以上詳しくは拙稿「イギリス自由党はなぜ没落したのか——一九二〇年代初頭の H・H・アスキスとロイド・ジョージ——」『同志社法学』第三三卷三・四号参照。なお、ちなみに自由党の研究者 R・ダグラスは、このときの自由党が最後に労働党の政権樹立を認めたことを批判して、この時点においてもっとも現実的であったのはほかならぬ自由党自身が政権をにぎることであったと主張する。すなわち、大体において自由党内には経験豊富な閣僚クラスの人材が横溢していたし、その意味で実際の政権担当能力を有する政党として自由党は「政権」に最も近い位置にあった。それに財界の動き、保守党内の不満分子(ランカシャーの自由貿易派)の動きなどみな「自由党政権」樹立に有利であった。だから、たとえば当時 W・チャーチルが示唆していたように、自由党は再開議会においてまず保守党政府を不信任する動議を提出し、ついで出現するであろう社会主義政府に対してもこれを拒絶するような動議を提出すべきであった。そうすれば三棘みの政治状況において「政権」は必ずや自由党にこそがこみ自由党は政権政党たりえた。これがもっとも現実的であった。こう R・ダグラスは主張するのである。(R. Douglas, *History of the Liberal Party 1859-1970* 1971. p. 174) ただもとより R・ダグラスの右の叙述はきわめて簡単なものであり、これだけでは説得的であるとは言えない。それにかりにかれの主張を頭に入れ当時の状況をさらに詳

しくみていったとしても、R・ダグラスの言うような「歴史的可能性」はどこにも存在しないのが実情であった。このときのアスキスやロイド・ジョージは実際問題としてきわめて御都合主義的な行動にはしており、したがって自由党が人心を収攬して状況の主導権を握り政権政党として歴史に残りうる条件など、このときどきにも存在しなかったのである。その意味でR・ダグラスの解釈は誤りである。なおこうした立場からR・ダグラスの解釈を批判するものとしてS. Koss Asquith (1976) pp. 264-265 参照。

- (40) K. Young, *Arthur James Balfour* (1963) p. 432.
 - (41) R. S. Churchill, *op. cit.*, p. 544 M. Cowling, *op. cit.*, p. 333.
 - (42) M. Cowling, *op. cit.*, p. 335.
 - (43) M. Cowling, *op. cit.*, p. 334 K. Middlemas & J. Barnes *op. cit.*, p. 252.
 - (44) K. Young, *op. cit.*, p. 433, R. S. Churchill, *op. cit.*, pp. 554-555.
 - (45) R. S. Churchill, *op. cit.*, p. 549.
 - (46) R. R. James, *op. cit.* pp. 189-191.
 - (47) R. S. Churchill, *op. cit.*, p. 545.
 - (48) ボールドウィンは総選挙で一敗地にまみれ党の内外に多くの政敵をつくったのだが、しかしよく注意してみると必ずしもかれは保守党内一般議員の全体的な信頼を失っていたと言うわけではなかった。と言うのも、一般議員はボールドウィンの掲げた「保護貿易政策」そのものに反対であったのではなく、むしろその政策の導入の仕方に関して疑念を呈していたにすぎなかったからである。それゆえ総選挙の前後にみられた執行部批判も、実はそれほど根深いものではなく、むしろ技術的批判と言う性格をもっていたと言って過言でなかったのである。だから、——落選議員の恨みは別として——選挙後オックスフォードやダービーなどの地方組織はいちはやくボールドウィン支援を決議したのである(以上 C. Cook, *op. cit.*, pp. 266-267)。
- それにボールドウィンは辞表を出すべきであると言う声がこのとき党内外にあったのは事実であるが、しかしそれもロザミアやビーヴァブルックなどの野心家たちに唱道された「運動」であったため、逆に多くの一般議員はこうした動きに反発し、むしろボールドウィン支持に傾いたと言う力学がはたらいたことも忘れてはならないであろう(以上 H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 198)。

- (49) M. Cowling, *op. cit.*, p. 335.
- (50) From Bridgeman to Baldwin, 8 December 1923 *Baldwin Papers* quoted in C. Cook, *op. cit.*, p. 181.
- (51) R. R. James *op. cit.*, p. 189.
- (52) R. R. James *op. cit.*, p. 189.
- (53) 同上 G. M. Young, *Stanley Baldwin* (1952) p. 70 K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, pp. 252-253 参照。
- (54) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 252 Kenneth Young, *op. cit.*, p. 56.
- (55) J. Campbell, Stanley Baldwin in J. P. Mackintosh *op. cit.*, Vol. I p. 198.
- (56) From Amery to Baldwin 21 December 1923 *Baldwin Papers* Vol. 42 参考 Cf. C. Cook, *op. cit.*, p. 183. ただこのクックの引用は筆者の引用したものと内容は同じであるが日付がちがっている。
- (57) Cf. A. W. Baldwin, *op. cit.*, p. 127.
- (58) Cf. R. Douglas, *op. cit.*, p. 176.
- (59) なおM・カウリングによれば、ボールドウィンが以上のように「労働党政権」を認めようとしたのは、労働党が下院第二党として政権担当の権利をもっていたからなどではなく、あくまでもかれらに政権を握らせることによって保守党を有利な条件にもち込むと言ふ戦術的な理由からであったとされる (M. Cowling, *op. cit.*, pp. 382-383)。たしかに、M・カウリングの主張にはあの種の真実がふくまれているし、またこうした解釈を傍証するような資料が存在しないわけではないのである。たとえばボールドウィン派の幹部N・チェンバレンなどは、不躰けに述べて「労働党政府など(社会に)『害をおよぼすほど強力なものではなう……』」(R. W. Lyman, *op. cit.*, p. 84)と事態のなぐむ意味を軽く考えていたし、また同派の議員S・ホアー (Samuel Hoare) も述べて「われわれはなお最大の政党であり……一二月以内にはふたたび勝利をおさめることができる」のだから、このであわてて連立内閣など組む必要はなう (R. R. James, *op. cit.*, p. 190)などと豪語していたからである。(参考) Cf. From Leslie Wilson to Baldwin, 30 December 1923 *Baldwin Papers* Vol. 35) これらボールドウィン派の人々が表明した自信は、なるほどこのときからがあくまでタクティックスにもとづいて行動したとみなしうる余地を残していると言えよう。

しかしそれにもかかわらず、右のようなM・カウリングの見方は——かれの解釈に一定の「真実」がふくまれるにせよ——

やはり、なおいささか歴史を矮小化しているように思われるのである。問題は個々の小さな資料に溺れることなく、ボールドウィンのたどった軌跡をもっと大きな流れのなかに理解することである。すなわち、ボールドウィンの「労働党政権」の承認と言う出来事も、一九二二年の「カールトン・クラブ集会」から一九二六年の「ゼネスト」にいたる混乱の時代に、かれが一貫して示したその和解の哲学と労働者に対する寛容と言う文脈のなかでとらえなければならぬと思われるのである。「戦術的次元」に拘泥することなく、あくまでも一九二〇年代のイギリス政治にかかわるボールドウィンの「戦略的次元」を視野に入れること、これが重要であるように思われるのである。

(60) ただしボールドウィン批判の声は、二月一日閣議決定以後完全にみられなくなってしまったと言うわけではなかった。『デイリー・メール』紙などのヒステリックな批判は別としても、たとえばシティの保守党指導者ハンスドン (Lord Hunsdon) などが、保守党のシティ支部の決議を通じボールドウィンに圧力をかけ、自由党と保守党の協力関係の樹立を訴えていたからである。これは悔りがたい圧力であったが、しかしボールドウィンはこれを黙殺した。これについては From Lord Hunsdon to Baldwin 18 December 1923, From Baldwin to Lord Hunsdon 19 December 1923 *Baldwin Papers* Vol. 35 参照。

- (61) *The Liberal Magazine* February 1924 p. 103.
- (62) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 198.
- (63) Max Beloff & Gillian Peele, *The Government of the United Kingdom: Political Authority in a Changing Society* (1980) p. 102.
- (64) *Parliamentary Debates* Vol. 169 col. 315.
- (65) *Parliamentary Debates* Vol. 169 col. 601 *The Times* 22 January 1924, H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 199.
- (66) T. Jones, *Whitehall Diary*, Vol. I p. 265.
- (67) T. Jones, *Whitehall Diary*, Vol. I p. 265.
- (68) Cf. *The Times* 22 January 1924 の社説。
- (69) *Parliamentary Debates* Vol. 169, col. 629.
- (70) *Parliamentary Debates* Vol. 169, col. 658.

(71) *Parliamentary Debates* Vol. 169, col. 674 繰りかえすまでもなく、この投票で自由党は労働党に支持票を投じたのだが、しかしこのとき自由党議員の一〇名が保守党に投じ、同じく合計一〇名が欠席したことを看過すべきではないであろう。(Cf. *Gleanings and Memoranda February 1924* p. 123 C. Cook, *op. cit.*, p. 195) 自由党がリーダーシップ不在のまま自壊の道をたどらねばならぬのせいじ的表現や、この思われるからである。

(72) A. J. P. Taylor, *English History 1914-1945* (1973) p. 270. 『イギリス現代史』I 都築忠七訳みすず書房一八九頁。
H. Nicolson, *op. cit.*, p. 384, F. Hardie, *The Political Influence of the British Monarchy 1868-1952* (1970) pp. 148-149.

(73) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 199.

(74) D. Marguand, *Ramsay MacDonald* (1977) p. 299.

(75) D. Marguand, *Ibid.*, p. 301.

(76) C. Cook, *op. cit.*, pp. 201-202.

(77) M Cole ed, *Beatrice Webb's Diaries 1924-1936* (1956) p. 2. M. Cowling, *op. cit.*, p. 359.

(78) Quoted in A. J. P. Taylor, *Bearverbrook* (1972) p. 221.

(79) Cf. Charles Petrie, *The Life and Letters of the Right Hon. Sir Austen Chamberlain* (1940) Vol. II, pp. 216-217, pp. 220-222, pp. 227-228 pp. 233-236.

(80) C. Petrie, *Ibid.*, pp. 239-240, K. Feiling, *op. cit.*, pp. 111-112.

(81) Cf. Iain Macleod, *Neville Chamberlain* (1961) pp. 100-101.

(82) この点については拙稿「スタンリー・ボールドウィンとイギリス保守党の再建——一九二二年カールトン・クラブ集会に至る政治過程——」(『同志社法学』第一四二号一〇〇頁以下参照。なお、ちなみに Cf. M. Cowling, *op. cit.*, p. 317, p. 320.

(83) Iain Macleod *op. cit.*, p. 101.

(84) 二月七日の「陰の内閣」はイギリス保守党の近代化のプロセスにおいてきわめて重要な位置を占めているように思われる。保守党の「陰の内閣」は今世紀に入ってバルフォア(一九〇五年)のもとで一応近代的体裁をととのえはじめたが、しかしそれでもなお戦後のオースチン・チェンバレンの時代(一九二一年—一九二二年)にいたるまできわめて単純素朴なものであ

た。招集権者もまた参加者の資格もあいまいであり、それは重要問題が派生したとき年に一度か二度散発的に集まるといった程度のものである。(R. M. Punnett, *Front-Bench Opposition* 1973 pp. 46-49) しかし一九二四年二月七日のポールドウィンの招集した「陰の内閣」は、そうした伝統的なあいまいさを払拭し、のちに本文のなかで述べるようにこれ以後専任の事務員をおいた正式のものとなる端緒となった、と言う点において画期的なものであった。(K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 264) なお、イギリスにおける「陰の内閣」の一般的説明については Cf. D. R. Turner, *The Shadow Cabinet in British Politics* (1969).

(58) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 202 なお、R・セシルはオースチン・チェンバレンの復帰には必ずしも反対ではなかったが、しかしバークトンヘッドの復帰には絶対反対であった。この点に関しオースチン・チェンバレン派と決して妥協すべきではないと語ら R・セシルの強硬意見については、From Cecil to Baldwin 1, February 1924 *Baldwin Papers* Vol. 35.

(59) R. S. Churchill *op. cit.*, p. 565.

(60) R. S. Churchill *op. cit.*, p. 565.

(88) H. M. Hyde, *op. cit.*, p. 202, L. S. Amery, *op. cit.*, Vol. II pp. 289-290, Cf. From Amery to Baldwin, 28 January 1924, *Baldwin Papers* Vol. 42.

(89) したがって、この「陰の内閣」の成功のおかげで、その直後派生したいわゆる「ランカシャーの反乱」——普通ポールドウィンを引きおろすため準備された陰謀とみなされている——も未遂に終わってしまったと言ふことを、ここで指摘しておく必要があろう。「ランカシャーの反乱」とは、二月九日ランカシャー・チェンシャー地方の保守党員がマンチェスターで同地区の臨時党大会(ダービーが議長)を開催、激しい勢いで党中央に保護貿易政策の放棄をせよとをさす。普通この種の大会への出席者は二・三百人であるときれるのだが、しかしこの時は約千名の党員があつまり氣勢をあげたといわれるのである。(R. T. McKenzie, *British Political Parties* 1964 p. 238 『英国の政党』上巻 早川崇、三沢潤生訳有斐閣三三〇頁) この地区の保守党員は、大体においてさきの総選挙で大変な不利益をこうむっていた。と言うのも党中央が保護貿易政策を打ちだしたおかげで自由貿易派の強い同地域では党の候補者に、自由貿易を主張するもの、部分的輸入制限を主張するもの、完全な保護貿易政策を主張するものがでて大混乱をおこしてしまい、その結果マンチェスターやリヴァプールなどで自由党に多くの議席をうばわれると言う事態が派生したからである。同地区で党中央ことに党首ポールドウィンに対する激しい怒りが渦巻いたゆ

えんであった。(J. Ramsden, *op. cit.*, p. 188) しかしながら、この動きはこれ以後全体として大きな問題とはならなかった。同大会議長ダービーが『モニング・ポスト』(Morning Post)の記者に述べて、大会の「決議案は、決して党幹部に対する不信任決議ではない……」と弁解したものは、(Quoted in R. T. McKenzie, *op. cit.*, p. 240 早川崇、三沢潤生訳三三三頁 J. Ramsden *op. cit.*, p. 189) 反乱は未遂に終ってしまったのである。その理由は、練りかえすまでもなく、やはり二月七日の「閣の内閣」にまつて各派指導者の意志統一がみられたからであった。

- (9) *Gleanings and Memoranda*, March 1924 p. 231.
- (10) Cf. *The Times* 12 February 1924.
- (11) *Gleanings and Memoranda* March 1924 pp. 231-234 以下 Cf. J. Ramsden *op. cit.*, pp. 189-190.
- (12) *Gleanings and Memoranda* March 1924 pp. 234-236.
- (13) *Gleanings and Memoranda* March 1924 p. 236.
- (14) Cf. D. Margund, *op. cit.*, pp. 309-311 以下 ハルニートン自叙伝の回想を参照の事。 Richard Burdon Haldane, *An Autobiography* (1929) p. 327.
- (15) D. Marguand, *op. cit.*, pp. 289-291 p. 298ff, Trevor Lloyd, James Ramsay MacDonald in J. P. Mackintosh ed, *op. cit.*, Vol. I p. 162 Cf. J. Campbell, *op. cit.*, pp. 85-87.
- (16) 以下 Cf. J. Ramsden, *op. cit.*, pp. 192-193.
- (17) Cf. J. Ramsden, *op. cit.*, pp. 195-196.
- (18) K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 264.
- (19) この「閣の内閣」は直屬たる事務局の役割について、ボールドウィン文書にあらわれる無署名のメモに詳しく説明され、その事。 *Baldwin Papers* Vol. 48.
- (20) 以下 K. Middlemas & J. Barnes *op. cit.*, p. 264. J. Ramsden, *op. cit.*, p. 195.
- (21) 以下 K. Middlemas & J. Barnes, *op. cit.*, p. 264, J. Ramsden, *op. cit.*, p. 195.
- (22) 以下 J. Ramsden, *op. cit.*, p. 196.
- (23) 以下 J. Ramsden, *op. cit.*, pp. 196-197, p. 228.

(105) 以上 J. Ramsden, *op. cit.*, p. 198, pp. 244-247 を参照。 Cf. *Gleanings and Memoranda* March 1924 pp. 241-342.

(106) Quoted in G. M. Young, *op. cit.*, p. 75.

付記 本稿校正中に John Barnes & David Nicholson (ed), *The Leo Amery Diaries Vol. 1 : 1896-1929* (1980) を入手した。しかし残念ながら本稿にこれを生かすことはできなかった。